

# 自閉スペクトラム症者 Temple Grandin の白日夢、 締めつけ機と夢の検討

名島 潤慈

## An investigation of Temple Grandin with autistic spectrum disorder : Focusing on her daydreams, squeeze machines, and dreams

Junji NAJIMA

### I はじめに

アメリカの Temple Grandin (1947. 8. 29-) (以下、G と略す) は自閉スペクトラム症者 (自閉症者) であり、かつ世界でも有数の家畜扱い機具設計士であり、さらにはコロラド州立大学の教授としての動物科学に関する教育と研究、自閉スペクトラム症とはどういうものかに関する世の人々に対する啓蒙活動、自閉スペクトラム症に苦しむ当事者やその家族に対するコンサルテーション活動、G 自身が考案した「締めつけ機 (squeeze machine)」による治療的支援、自閉スペクトラム症に関する出版活動など、きわめて活発かつ能動的な人生を送ってきている。このような人生はGが絶えず自己の自閉スペクトラム症と向き合いつづけてきた成果とも言えるし、またG自身がしばしば述懐しているように多くの「優れた指導者 (mentor)」に恵まれていたためとも言える。

G は現在、71 歳。G の最大の特性は、「画像で考える技能」(visual thinking skill) である。学業面では、フランクリン・ピアース大学での卒業論文 (Grandin, 1970) で学士号、アリゾナ州立大学での修士論文 (Grandin, 1975) で動物学修士、イリノイ大学での博士論文 (Grandin, 1989) で動物学博士を取得している。専攻は、学部は心理学、修士課程も心理学であったが、修士課程の2年目に動物科学に転じている。当時のGはパートタイムで牛糞 (cattle chute) のセールスをしていた。

MRI (磁気共鳴画像)、fMRI (機能的MRI)、DTI (拡散テンソル画像法)、HDFT (高解像神経線維解析装置) などから見たGの脳生理学的特徴は次のようなものである (Grandin & Panek, 2013)。①小脳が標準より20%小さい (Gのバランス感覚はよくない)。②人の顔の図を見たさいの腹側視覚野の活性化は対照被験者より低い (人の顔を覚えにくい)。③Gの左側脳室は7.093cm、右側脳室は3.868cmで左側脳室が長く、しかも頭頂葉にまで伸びている (いくつかの指令に迅速に従って作業をこなすのが苦手)。④左の扁桃核は1,719mm<sup>3</sup>、右は1,829mm<sup>3</sup>で標準より約22%大きい (不安や恐怖心が強い)。⑤左の嗅内野は対照被験者より12%厚く、右の嗅内野は23%厚い (記憶力がずば抜けている)。⑥脳内の神経線維のなかで発話産出と視覚的表象に関わる領域は対照被験者に比べて大きく乱れている。

本稿では10代までのGに焦点をあて、Gが見た白日夢や夢の内容と意味、締めつけ機との関

連性などについて検討したい。締めつけ機は、V字型の装置のなかに腹ばいに寝そべったGの体を板で両側から締めつけて、安心感や安らぎ、他者への共感性をGにもたらず機械である。Gが最初のタイプの締めつけ機を製作したのは18歳のときであった。

## II Temple Grandin の生活史

本節では以下、Gの書いたものを基にしてGの生活史について述べる。もっぱらGの1986年と1995年の著作に依拠するが、それ以外も適宜参照した(Grandin, 1984, 1995, 2008; Grandin & Scariano, 1986; Grandin & Barron, 2005; Grandin & Panek, 2013)。補足的な事柄ないし筆者の感想は[ ]のなかに書き入れた。なお、Gの発達時期の区分はおおまかなものにすぎない。

感覚・感情に関する英語は和訳しにくい。例えば、Gの著作にはcomfortがよく出てくる。特に、最初の本である*Emergence: Labeled autistic* (Grandin & Scariano, 1986)には頻出する。そして、このcomfortはcontactと組み合わせられた場合、contact comfortとして何度も出てくる。この言葉は、翻訳本では「接触慰撫」と訳されている。Harlow (1971)の*Learning to love*でも、contact comfortは翻訳本では「接触慰撫」と訳されている。しかし、「接触慰撫」では不明瞭なので本稿では「接触による安らぎ」とし、craving for contact comfortは「接触による安らぎへの渴望」とし、a comfort device (翻訳本では「私を慰撫してくれる考案器具」)は「私に安らぎをもたらしてくれる装置」とする。

### 1. 出生と家族

Gは1947年8月29日にアメリカのボストンにて出生。Gの母親のEustacia CutlerがGに関して「行動障害児診断チェックリスト 形式E-2」に答えたものからすれば、Gの妊娠・出産はノーマル、未熟児ではない、生後6か月間正常、生後4か月から8か月の間に母親が近づくと抱き上げられることを期待するような行動を見せたかについては「まったくなかった」。また、一人歩きは13・15か月の箇所にチェックが、最初の発語は3・4歳の箇所にチェックが入っている。このように、Gの発語は遅い。[母親が答えた「行動障害児診断チェックリスト 形式E-2」は、Gの*Emergence: Labeled autistic*の巻末に付録として付けられている。このチェックリストはカリフォルニア州サンディエゴにある児童行動調査研究所が作成。]

父親のRichard Grandinは気短な性格で、癩癪持ちの不動産業者。日常生活でのこだわりも強く、父親には軽い自閉スペクトラム症があったのではないかとGは推測している(Grandin, 1995)。父親は、Gに対してはあまり好意的ではなかった。

Gは母親が19歳のときの子で、長女。2人の妹と1人の弟がいる(彼らは自閉スペクトラム症ではない)。Gの妹は1歳半年下で、もう1人の妹は6歳年下、弟は8歳年下。妹の1人は美的感覚にすぐれ、古い家屋の内装改造のプロ。

Gの母親はジャーナリストかつ作家で、テレビのドキュメンタリー番組のために知的障害者や情緒障害児に関する台本を書いたことがある(オハイオ州賞を受賞)。Gの母親も母方祖母も視覚的スキルにたけ、知的能力は高い。母方祖父はMITで工学を修めたエンジニアで、飛行機の自動操縦装置の重要な部分であるフラックス・バルブ(flux valve)(磁界を測定する機器)を発明。

シャイで物静か。一方、父方祖父はノースダコタ州のグランディンで農場を経営。総じて父方の系統は癩癩持ち。なお、Gの父親も母親も大学卒である。

## 2. 幼児期

Gが生後6か月のとき、母親がGを抱くとGが体を硬直させることに母親は気づいた。その2、3か月後、母親がGを腕に抱きよせようとしたところ、Gは母親を引っ掻いた。

Gは3歳のとき、言葉が出ない、物を壊す、視線を絡ませない、宙を見ているなどの理由で、母親に連れられてボストン子ども病院神経科の神経科医の診察を受けた。脳波や聴覚検査は正常。神経科医はGを「脳損傷 (brain damage)」と診断した。彼はまた、Gのコミュニケーション障害のためのスピーチセラピーを勧め、スピーチセラピーが受けられる特別な保育園（2人の先生が自宅で運営）を紹介した。そのスピーチセラピーでは、Gがテクニカラーの天然色映画を見るような夢にふけていると、スピーチセラピストがGの顎をとらえて現実世界に引き戻したりした。

Gには触覚過敏のみでなく聴覚過敏もあり、2、3歳のころのGの耳は調節のきかないマイクロフォンのようで、すべての音が内容とは無関係に圧倒的な大きさで鳴り響いた。

子どものころ聴覚面ではまた、無声子音をうまく聞きとることができず、catもhatもpatも同じ単語に聞こえた (Grandin & Panek, 2013)。[例えば「カップ (cup)」の場合、無声子音が聞こえないのでGには「アップ」と聞こえる。そこでGのスピーチセラピストはカップを手を持って、「ク、ク、ク、アッ、プ、プ、プ」と言ってごらんとGに教示した (Grandin, 2008)。無声子音を強調して発音したわけである。]

3歳から10歳まで、母親が雇った住み込みの女性家庭教師 (クレイ先生) がいた。家庭教師はGや妹と一緒に遊んだり、絵をかいたり、良いしつけを身につけさせるようにした。Gが白日夢にふけていると、その家庭教師は、今すぐスープを食べ終えないとGの顔の前で紙袋を破裂させると警告することによって、Gを現実に戻したりした。[聴覚過敏性の高いGにとって、紙袋の破裂音は耐えがたい苦痛をもたらすものであった。]

3歳のころのGは破壊的かつ暴力的で、①大便を使って遊び、できたものを部屋中にまき散らす、②パズルを噛んでぐちゃぐちゃにしたボール紙を床一面に吐き散らす、③邪魔されると花瓶でも大便でも手当たり次第に相手に投げつける、④しょっちゅう癩癩を起こし、いつも金切り声でわめき続ける、といった状態であった。Gはまた、1人ではいるときには絨毯の繊維をいじったり、指の間からこぼれ落ちる砂をじっと見つめたりした。[砂の件は、形がそれぞれ微妙に異なる砂粒をGがひたすら見つづけていると瞑想状態に入って、外界からの騒音から遮断されてしまうという目的があった。なお、これはGの場合ではないが、次から次へどこぼれ落ちていく砂のリズミカルな感触を楽しむような自閉症児もいる。]

Gはなかなか話し言葉が出なかったが、スピーチセラピーを受けはじめてから、3歳半でやっと話しはじめた。話しはじめる前は、自分が言いたいことは分かっているのに言葉が出ないという欲求不満から、Gはただわめき続けていた。

Gはその後、5歳で小さな私立小学校附属の、健全児ばかりのキンダーガーデンに入園し、集

中的な教育を受けた。5歳のころには既に、ダンボールを使って工作した。Gはまた、5歳になるころ母親から、「教会にはおめかしして行き、お行儀よくする」「家でもおばあちゃんの家でも正式な食事では最後までじっと座っている」よう言いつけられ、言いつけを守らないと、楽しみにしていることをお預けにされた。[Gを施設に入れたらどうかという専門家たちからの勧めをGの母親は断り、Gの教育に専念した。Gの母親は特に、社会的なマナーやエチケット（順番を守る、共有する、ずるをしないなど）を身につけさせることに心を砕いた。Gは後年、このような母親の教育方針に深く感謝している（Grandin & Barron, 2005）。]

5歳のときの重要な出来事として、Gの白日夢（夢想）が挙げられる。Gが後に『オーソモレキュラー精神医学雑誌』に投稿した論文によれば（その論文執筆時のGは36歳で、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校で動物科学分野の博士論文を準備中）、「5歳の私は強い圧迫感を切望して、私があるなかに入って抱きしめられるような機械装置を夢想したものだ」（Grandin, 1984）。

その他、年齢ははっきりしないが、Gは子どものころ、人それぞれの匂いに興味をもっていたので、犬のように人を嗅ぐことが好きだった（敏感な嗅覚）。家には仲の悪い猫が2匹いたし、犬もいた。また、子どものころ、つま先歩きをしていたせいで、Gの靴のつま先はいつもささくれていた。体をリズムカルに前後に揺するロッキング（rocking）や、床に座って自分でやるくるくる回し（spinning）も頻発した。

### 3. 児童期

Gは6歳のとき、圧迫刺激（pressure stimulation）を求めて、毛布にくるまったり、ソファークッションの下に潜り込んだりした。身体への圧迫がリラクセーション効果をもたらしたからである。

8歳のとき、読みの能力が低かったので、母親がフォニックス（phonics）で学習させた（母親はGに「読み」を教えるのに5、6か月間、週に5日、1日に30分費やした）。また、8歳のとき、普通の子どもなら幼児期に見られたはずの「ごっこ遊び」ができるようになった。[同じ自閉症でも、もしもGが低機能自閉症であったなら、8歳になってもごっこ遊びはできなかったろう。]

小学校3年のとき、（リース家の双子に引っ張られた形で）犬の扮装をして学校のドッグショーに出演した。また、オモチャのミシンで学校劇の衣装を縫ったりした。

小学3年生の終わりのころ母親の勧めでケープ・コッドの海辺のサマーキャンプに参加したが、キャンプ地でGはある「騒ぎ」を引き起こした。その後、父親と母親は小児科医のベルハム博士の勧めで、1956年7月、児童精神科医のスタイン博士（Dr. Stein）にGのことを相談した。スタイン博士はドイツ人、ユダヤ教徒、フロイト派で、Gの小学4年生から3年間、月に一度定期的に会話やゲームを通してGの治療にあたった。もっとも、G自身はスタイン博士に対して用心して、要らぬことは話さなかったという。なお、1956年のWISC知能テストでは、GのIQは120、1959年（12歳）にはIQは137ときわめて高かった。

[サマーキャンプに参加した日、水着に着かえたGを見て通りすがりの少年が、「おっぱい（boobs）が全然ない」と連れに言った。Gはboobsという言葉が気に入って、何度も繰り返し

口にした。少年たちは笑ったが、キャビン・カウンセラーは顔をしかめた。その後、同じキャビンに属するある少女との会話のなかで、少女が、赤ちゃんに飲ませるために女の子は boobs が膨らんでくる、男の子には赤ちゃんを作るものがある、それを見たいのなら男の子におちんちん (peter) を見せてと頼んだらどうかと G に言った。そこで G は翌日、水泳に行ったとき、男子に peter を見せてと頼んだ。男子は仰天して、お前は頭がおかしいんじゃないかと言って立ち去り、その後男子は別の男子たちにこのことを話した。

ところで G はキャンプ地での第 1 週目の終わりに尿道炎となり、キャンプ医の治療を受けたが、そのさいナースは、この子は自慰をしたんですと言った。結局、母親が初めてスタイン博士に相談した後の手紙のなかで述べているように、サマーキャンプを運営するスタッフの人たちは G のことを「変態 (pervert)」とみなしたわけである。しかし、もともと G の好奇心と強迫心性とが相まってこのような事態が生じたのであり、運営スタッフとしては、G を変態扱いして事を処理するよりも、何が良くて何が悪かったのかをきちんと G に教育すべきであったと思われる。]

[G の母親が手紙のなかで「心理的損傷という先生的前提 (your premise of psychic injury)」云々と書いているように、スタイン博士は G の不適応状態が過去の何らかの心理的な傷によるものだと考えていた。それに、もともと 1956 年当時においては、自閉スペクトラム症は何らかの心理的損傷によって引き起こされるという見方が大勢を占めていた。]

10 歳のときの G は Ayres のチェックリストで、触覚防衛度が 15 点中 9 点であった。G はまた、10 歳のころ、どこにでも自転車で行き、そのさいいつも規則を守っていた。[触覚防衛 (tactile defensiveness) とは、触覚刺激に対して拒否的・感情的に反応する傾向のことである (Ayres, 1979)。G は大人になっても純毛の衣服は我慢できない、ナイトガウンは脚と脚が触れ合う感触が嫌い、医者に耳垢を掃除させるのも苦手という。]

小学 4 年生のとき、G と友人のエレノア・グリフィンは、木工作業を許可された最初の女生徒になった。もともと G は幼いころから物を作るのが好きであった。木の上に家を作ったり、飛行機や凧や、スカーフを利用したパラシュートを作ったりした。小学 4 年生のときにはまた、粘土で素敵な馬を作った。[G が馬の顔ばかり描くので、教師は馬の全体像を描くよう励ました。そして、それができるようになると、教師は馬の像を粘土で作るよう勧めた。]

9 歳のとき、母から勧められて大人のクリスマスコンサートで *America the Beautiful* を独唱し、大きな拍手をもらったが、これは G の自尊感情を高めた (Grandin & Barron, 2005)。

10 歳か 11 歳の頃、プロテスタント信仰がユダヤ教やカトリックよりも上だということは理屈に合わないように思えた。G 自身はプロテスタントのエピスコパル派 (聖公会) の教会 (Episcopal Church) の方針で育てられたが、G の周囲にはカトリックやユダヤ教徒たちがいた。G は家族に連れられて日曜日ごとに聖公会の教会に通ったが、G にとっては退屈なものであったという。

その他、3 年生の教師が学校劇用のコスチュームを作るのを手伝った (小学 5 年生)。G は絵や工作も上手で、学校や家でほめられた。[G が小学校に入ったとき、G の母親は G のために本格的な画材と遠近法の本を買っていた (Grandin, 2008)]

G は国語も得意であった。ただし、課題として書いた詩はスベルに間違いが多く、韻も踏んでいなかった。

小学校で始業や終業のベルの音を聞くと、まるで歯医者さんのドリルで歯を削られているときに感じるような痛みに襲われた。

Gが小学校で癩癩を起こすと、その晩は母親が、Gの好きなテレビ番組の「ハウディー・ドゥーディ」を見ることを禁止した。[Howdy Doodyは1947-1960年までアメリカのNBC放送で放映された子ども向け番組の主人公。彼はそばかすとカーボーイスタイルの腹話術人形で、その声を出していたのはBuffalo Bob Smith。]

#### 4. 青年期前期

Gはヴァレイ・カントリー小学校を卒業した後、コネティカット州ノーウィックのチェリー・ヒル女子校に7年生として入学した。母親が選んだ生徒数400名の大規模な私立女子校であった。13人の生徒に一人の教師がついて全教科を教えていた小学校とは異なり、1クラスが30~40人の生徒で、しかも科目ごとに教師が異なるその普通学校は、Gに混乱をもたらした。成績も、例えば数学やフランス語は視覚的に学習されないのよくなかった。授業が分からずに退屈したGは、しばしば学校内でいたずらをした。

ところで、Gの成績低下と悪ふざけについて学校側はGの母親に連絡し、母親がそのことをスタイン博士に連絡した結果、スタイン博士は彼が個人的に知っていたチェリー・ヒル女子校のハロー校長に手紙を出した。内容は、「Gは幼児期に脳損傷というレッテルを貼られたが誤っている。精神病でもない。強いて言えば神経症児。優れた知的能力がある。Gは今もってパーソナリティ形成の健康な発達過程にある」云々といったものであった。

しかしながら、Gの問題行動は収まらなかった。Gを「うすのろ (retard)」と嘲った女子生徒に対してGは手に持っていた歴史の教科書を投げつけ、その本が彼女の目に当たった結果チェリー・ヒル女子校を退学となった。そして、1960年1月、母親がかつて取材したことのあるバーモント州のマウンテン・カントリー校（全寮制学校）に入った。そこは「情緒障害」があるものの才能豊かな生徒たち32名の寄宿学校で、Gはファミリーユニットの1つに住んだ。広大な農場と厩舎があり、Gは馬に夢中になった。もっとも、ここでもいじめはあり、Gは「テープレコーダー (tape recorder)」「馬車馬 (work horse)」「ガイコツ (bones)」などと呼ばれた。[テープレコーダーという徒名は前のチェリー・ヒル女子校でもつけられていた。Gが関心を抱いたことや印象に残った出来事を何度もしつこく、一言一句違わずに相手に繰り返して語ったからである。]

もっとも、ルームメイトはGと同様馬が好きだったので、一緒に乗馬などを楽しんだ。また、心理学教師 (psychology teacher) のブルック先生が動物についての話をしてくれたり、「エイムズの錯覚部屋 (Ames Room)」の映画を見せたりしてGの好奇心をかきたてた。

結局Gはこの寄宿学校で5年間過ごした。納屋の屋根ふきをしたり、寮の増築作業を手伝ったりした。[マウンテン・カントリー校に入学して最初の半年間は、問題が起きるとかんしゃくをおこして相手をひっぱたいていた。ダウニー先生がついにGの大好きな乗馬を1週間禁止したので、Gは一生懸命に考えて、怒る代わりに泣くことにした。この、「人前で怒りを爆発させる」代わりに「人目のない所で泣く」というやり方は、Gが社会に出てから大いに役立つことになった。]

## 5. 青年期中期

ところでGは14歳で生理が始まってから、数週間ないし数か月おきにパニック発作（ひどい恐怖感と不安）に襲われるようになった。

15歳のとき、Gは叔母から自閉症だと告げられた（Grandin, 2008）。

16歳の夏、遊園地で「ローター」(rotor) に乗り、一時的に神経発作（nerve attacks）が緩和した。[ローターは鉛直回転軸まわりで回転する中空の円筒。回転速度が速くなると人々は円筒の内壁に押しつけられ、床が沈んでも落ちないで浮いていた。Gはローターによって安らぎ感とリラックス感を抱いた。]

ところで、しょっちゅうパニック発作（神経発作）に襲われていたGは最初渋ったものの、「嫌なら2週間で帰ってきなさい」という母親の巧みな勧めで、アリゾナ州で観光牧場を営んでいるアン・ブレッケン（Ann Brecheen）叔母を夏休みに訪問した。そこでは、予防接種や烙印を押されたりする予定の荒々しい子牛たちが牛樋（締めつけ樋 squeeze chute）のなかに入れられると落ち着くのを観察した。また、滞在中にパニック発作が起こったので、Gはアン叔母に頼んで、自ら牛樋のなかに入ってみた。Gの頭部は首窓（headgate）で固定され、アン叔母が外側から牛樋を操作した。最初体に圧迫感を感じたとき、Gは一瞬逃れようとしたが、5秒もするとゆったりとした波が押し寄せてきた。30分後に牛樋を出たが、1時間経ってもGの心は平静で満ち足りていた。

その他、アン叔母のマニュアル式小型トラックを数週間牧場の泥道で運転して、運転技術をマスターした（郵便受けまでの約5kmを往復した）。18歳のときであった。

秋になって高校に戻ると、高校の科学の教師のウィリアム・カーロック（William Carlock）先生に助言してもらい、Gはスクラップの材木を使って、早速締めつけ機らしき装置を自作した。しかし、高校の学校心理士（high school psychologist）はこの締めつけ箱（squeeze box）は異様で気味悪いと述べ、校長や学校精神科医（school psychiatrist）も締めつけ機の使用に反対した。

一方、カーロック先生はGの話を傾聴・激励し、Gに科学的精神のあり方を教え（締めつけ機が効果があるのならなぜ効果があるのかを探求したらどうか）、さらには科学論文を検索するための *Psychological Abstracts* や *Index Medicus* の使い方を教示した。[カーロック先生の教えは、後に役立つものとなった。Gは34歳のときに瞼にできた皮膚ガンを除去する手術を受けたが、術後の炎症と毎晩見る「盲目になる夢」、さらには頭痛・大腸炎・不安発作に襲われた。このままでは神経が完全にまいてしまうし、盲目になるかもしれないという恐怖には締めつけ機も打ち勝てなかった。そこでGは *Index Medicus* を通して、*Archives of General Psychiatry* の1980年1月号に掲載された Treatment of endogenous anxiety with phobic, hysterical and hypochondriacal symptoms (Sheehan et al., 1980) という論文に行きあたった。恐怖症的・ヒステリー的・心気症的徴候を伴った内因性不安の治療について書かれたその論文にはGの諸症状とよく似たものが記載され、さらには不安を統制する薬物として、抗うつ薬のトフラニール（Tofranil）の名前が挙げられていた（抗うつ薬が不安をコントロールするのに効果があるということは雑誌 *Psychology Today* で知っていた）。トフラニールは商品名で、成分名はイミプラミン（imipramine）である。Gはしばらく躊躇した後、トフラニール1日分50mgを毎日処方してくれるよう医師に

頼んだ。トフラニールの効果は劇的で、2日以内に気持ちがよくなった (Grandin, 1995)。ちなみに、薬は3年後には、効果がより高くて副作用が少ない、トフラニール系のノルプラミン (成分名はデシプラミン) に切り替えられた。]

高校生の頃、父親から借りたウォールストリートジャーナルで、ビジネスや仕事上の人間関係についての情報を蓄えた。また、高校時代、ウィンターカーニバルの看板作りに熱中し、周囲から認められるようになった。マウンテン・カンントリー校の卒業式は、1966年6月12日であった。

さて、高校を卒業したGはマウンテン・カンントリー校に近い小規模の大学、ニューハンプシャー州のフランクリン・ピアース大学の心理学コースに入学した。

大学に入ったばかりのころ、親しげに接近してくる女子学生に対してGが自分の自閉症や締めつけ機のことを話したところ、彼女はそれを同級生たちにふれ回り、Gは同級生たちに嘲笑された。[Gは立て続けに三度も同じ目に会ったという。このエピソードは、自分に接近してくる人間をたやすく信用してしまうという、大学時代のGの弱さを示している。もっとも、Gから自閉スペクトラム症や締めつけ機のことを打ち明けられた女子学生にしてみれば、これらは自分の心のなかに保持しておくにはあまりにも異様な話であり、他人に話さざるをえなかったものと推測される。]

しかしながら、幸いなことに大学入学後もカーロック先生がサポートしてくれたので、Gは週末には先生の実験室に行って締めつけ機を改良していった。そして、大学在学中、締めつけ機の二番目のプロトタイプ「PACES」(Pressure Apparatus Controlled Environment Sensory) を作製した。これは体を締めつける2枚の合板の内張りが気泡入りパッドになっていた。もともとGは締めつけ機からの圧迫感によって安らぎを得ていたが、このPACESで用いた2枚の柔らかい、気泡入りパッドを付けられた合板 (two soft foam-padded panels) によって、共感 (empathy) というものがどういう感じのものなのかを知るようになった。当時のGの日記には、「締めつけ機は、母の両腕にかかえられ、抱きしめられ、優しくあやされているような感覚をもたらしてくれる (The squeeze chute gives the feeling of being held, cuddled and gently cradled in Mother's arms.)」と書かれている。

18歳で初めて作った締めつけ機では、Gは外側から人の助けを借りて締めつけられたり緩められたりしたが、後にGはエアシリンダーとコントロールバルブを用いて、体への圧迫度を自分で自由自在にコントロールできるよう改良した。結局、気泡入りパッドを付けられた合板と圧迫度の自由なコントロールによって、締めつけ機はGの「触角防衛という防壁 (barrier of tactile defensiveness)」を打ち破り、母親・カーロック先生・アン叔母といった人たちからの「愛情と気づかい (love and concern)」を感じさせてくれた。[パッドを付けられた合板を持つ締めつけ機の構造図は Grandin (1983) を参照。]

Gはこのように、締めつけ機に対してずいぶん力を注いだ。Gの卒業論文も、この締めつけ機の効果性に関するものであった (Grandin, 1970)。

表 1 Temple Grandin が見た白日夢と夢\*1

番号	年齢	白日夢・夢のタイトル	白日夢・夢の内容	白日夢・夢のなかの感情・感覚	白日夢・夢についての G の感想
Dd1	5 歳	私を強く抱きかかえてくれるような機械装置の白日夢 (Grandin, 1984)	(毛布で体を包んだりソファのクッションの下に入ったりしたが十分な圧迫感は得られなかったので) 強い圧迫感を熱望し、自分そのなかに入り込んで抱きかかえられるような機械装置を夢想したものだ (I would daydream)*2。	強い圧迫感	3 歳から 10 歳までいた住み込みの家庭教師はまったくといってよいほど抱きしめたり体に触れたりしてくれなかった。
Dd2	小学 2 年生	圧迫感を与えてくれる魔法の装置の白日夢 (Grandin & Scariano, 1986)	集中的かつ快い圧迫感を私の体に与えてくれるであろう魔法の装置を夢想するようになった (I began dreaming about a magical device.)。	快い圧迫感。	成人した今から見ると、私は触覚刺激に飢えていた。家庭教師が抱擁してくれなかったので、優しいタッチングに飢えていた。
Dd3	小学 3 年生	安らぎをもたらす機械の白日夢 (Grandin & Scariano, 1986)	寝棺のような箱のなかに仰向けに寝て、優しいがしっかりと包んでくれる程度にプラスチックの内張りを膨らませる (Dd3)。	圧迫感。	授業を受けているときの白日夢。
Dd4	小学生*3	暖められた小さな囲いの白日夢 (Grandin & Scariano, 1986)	イメージのなかで縦横 3 フィートの小さな囲いを作り、そのなかに入って戸を開める。そして、この囲いは暖められる (Dd4)。	暖かさ。	圧迫感と暖かさはダメージを受けている神経組織の興奮を抑えてくれる。
Dd5	小学 4 年生	私を包み込んでくれる魔法の箱の白日夢 (Grandin & Scariano, 1986)	暖かい、慈愛のこもった両腕のように私を包み込んでくれる魔法の箱を夢想した (I dreamed of my magical box.)。	暖かさ。	社会の教科書から歴史上の事柄を学ぶのは退屈なので、教室の片隅に座って心の世界に逃げ込んで夢想した。
D1 D2	10 代 後半	(複数の) 愉快な夢 (Grandin & Johnson, 2005)	(最初は 2 枚の硬い合板で締めつけ機を作っていたが、柔らかい当て物を付け足して締めつけ機を改良していくと) 子犬たちを可愛がる夢 (D1) や、アン叔母のいる牧場に行って青空の下緑の牧草地にいる夢 (D2) を見る。	楽しさ	合板の圧力で気分が落ち着き、柔らかい当て物のおかげで人に対して優しい、穏やかな気持ちを抱くようになる。猿の赤ちゃんが針金製の母親猿よりも柔らかい布製の母親猿を好んだという 1960 年代の Harlow の実験*4 を思い出す。

\* 1 表のなかの Dd は白日夢、D は夢を表す。白日夢と夢のタイトルは筆者がつけた。白日夢の内容のところでは、「夢想」に対応する英語表現を書き加えておいた。

\* 2 別の本には (Grandin & Scariano, 1986)、「私が最初に思いついた『機械』のモデルは、私の体に圧力をかける膨らませ式のスーツ (inflatable suit) であった」とある。

\* 3 明確に何年生と書かれていないが、Dd3 と Dd5 の間の夢想なので、小学 3 年生と思われる。

\* 4 この実験の詳細は、Harlow (1971) の *Learning to love* にまとめられている。

### Ⅲ Gの白日夢の機能

白日夢（白昼夢、夢想）は、実際に眠っていないのにあたかも夢を見ているかのように空想・夢想にひたっているような状態である。白日夢の内容は視覚的イメージが多いが、なかには聴覚的・触角的イメージもある。

Gの白日夢は表1にあるように、5歳から小学校4年生までの計5つである。それらは、「強く抱きかかえてくれる機械装置」(Dd1)、「集中的かつ快い圧迫感を与えてくれる魔法の装置」(Dd2)、安らぎを与えてくれる機械としての「内張りでやさしく包んでくれる寝棺のような箱」(Dd3)と「暖められた小さな囲い」(Dd4)、「私を包み込んでくれる魔法の箱」(Dd5)である。抱きかかえる圧力は、最初のDd1こそ強い圧迫感であるが、残りは心地よい、やさしい圧迫感である。[実際にはもっと多くの白日夢があったと推測されるが、表1ではGの著作にかなり明確にその内容が記されている計5つのものを取り上げた。]

Dd1の強い圧迫感については、G自身が述べているように、ベビーシッター兼家庭教師であった住み込み女性がGをまったく抱きしめたり体に触れたりすることがなかったことで、それだけ強い圧迫感を熱望したものであろう。もっとも、実際に強く抱きしめられたとしたら、「接触からの退避 (withdrawal from touch)」を有するGは体を硬直させるか、相手を引掻いて遠ざけたことであろう。なお、白日夢のなかでGを強く抱きかかえるのが人間ではなくて、「機械装置」であることは興味深い。機械装置であれば故障しない限り着実に仕事をしてくれるし、人間関係のようなわずらわしさが無い。

ところで、最初のDd1はビニール製の空気膨張式玩具を大きくしたようなものであり、中に入っている人にかかる圧力は強いし、何よりも圧力を自分で自由にコントロールできない。しかし、Dd3のところでGは「最も大事なものは、想像のなかでさえ、プラスチックの内張りによる圧迫感をコントロールするのは私であることだった」と述べているように、可能なかぎりGが主体的に圧迫感を統御する必要がある。相手が人間の場合には、相手の都合や思い込みでGを一方的に抱きしめたりするので、Gとしてはそれを回避せざるをえない。Gが統制可能で、かつ安心と心地よさを与えてくれるような装置があれば、Gの神経組織が耐えられないような多量の入力刺激でGの諸感覚が圧倒されることなく、Gの「接触による安らぎへの渴望 (craving for contact comfort)」を充足させることができよう。

ちなみに、白日夢は一般にイマジネーションによる願望充足の特性が強いものであるが、Gの夢想では、Dd3の圧迫感や、Dd4「イメージのなかで小さな囲いを作り、そのなかに入って戸を閉め、囲いを暖める」のような、イメージ療法としての側面がうかがえる。G自身はもちろんイメージ療法といった言葉をまったく用いていないが、Dd4を書いている箇所「暖かさと圧迫感には特にダメージを受けている神経組織の興奮を抑える傾向がある」(Warmth and pressure tend to lessen arousal, especially in a damaged nervous system.) というコメントを記しているので、Dd3やDd4を夢想することで当時のGは実際に高ぶった心が平穏化するような経験をしていたのではないかと推測される。そうだとすればこれはイメージ（白日夢というイメージ化）を用いた自己治療であり、大変興味深い。

Dd5について触れておくと、ここでの夢想の内容は、「暖かくて慈愛のこもった両腕のように

私を包み込んでくれる魔法の箱 (my magical box which cradled me like warm, loving arms) である。この夢についてGの記述はごく簡単に内容の詳細が分からないが、興味深いのは、ここで cradle という言葉が使われていることである。cradle は名詞形では揺りかごであり、一般的な揺りかごは基部が揺り子 (rockers) になっている。結局、赤ん坊を両腕で抱いてあやす場合にも揺りかごに入れてあやす場合にも、そこには適度な揺れが伴っている。Gが小さい子どもに行っていたロッキングは例えば大きな騒音といった不快な状況に遭遇したときにGが行っていた対処行動なのであるが、Dd5ではおそらく、暖かい両腕のような箱に抱かれてゆっくりと揺されるといったイメージである。つまり、ここには抱かれることによる適度の圧迫感と暖かさの他に、ゆっくりとした揺れの要素が加わっているようで、大変興味深い。

#### IV Gが製作した締めつけ機とGが見た夢

最初の締めつけ機は板だけのいわば「硬い締めつけ機」であったが、その後すぐにパッドを付けた「柔らかい締めつけ機」になり、最終的には体に加わる圧力を微妙かつ自在に調節できるコンプレッサー付きの柔らかい締めつけ機となった。このようにGは締めつけ機を何度も改良しながら用いてきた。結局、硬い締めつけ機の機能はパニック発作(ひどい恐怖感と不安)を低減させることにあったが、柔らかい締めつけ機はパニック発作の低減のみでなく、情緒的世界(やさしさや情愛の世界)への扉を開いてくれた。既述の如くGは34歳のときに抗うつ薬のトフラニールを飲み、それによってGのパニック発作は激減している。まとめれば、抗うつ薬は締めつけ機に比べるとパニック発作の発生を抑える効果が非常に高いが、情緒的世界への参入となると柔らかい締めつけ機にかなわない。

ところで、第三者の目から見ると、締めつけ機はGに対してどのように作用するのだろうか。

これは大学時代よりも後のことになるが、1993年8月、脳神経外科医のオリバー・サックス(Oliver Sacks)がGに会いにいった(Sacks, 1995)。Gは当時45歳で、コロラド州立大学の動物学部の助教授であった。

サックスはまずコロラド州立大学でGと話した後、次の日に、大学から少し離れたところにあるGの自宅に行った。Gの寝室には、産業用のコンプレッサーにつなげられた(柔らかい)締めつけ機が置いてあった。Gはサックスの目の前で締めつけ機のなかにうつ伏せになってコンプレッサーのスイッチを入れた。そして、体の両横の板がGの体をぴったり挟むと(2枚の木の板は柔らかな分厚いパッドにくるまれていた)、Gは調節ボタンを調節して圧力を少し緩めた。そして、そのままGがうつ伏せになっていると、大きくてこわばっていたGの声は柔らかく、穏やかになっていった。Gによれば、締めつけ機に横たわっていると、母親やアン叔母やカーロック先生たちが注いでくれた愛情や、Gが彼らに対して抱いている愛情を感じるのだという。このように締めつけ機はGの体を緩めるだけでなく、いつもは閉ざされている情緒的世界へのドアを開いてくれる。

ところで、Gの過去を振り返ってみると、Gは14歳で思春期に入ってからしょっちゅうパニック発作に襲われるようになった。そうしたなかで、16歳の夏に遊園地で「ローター」に乗り、一時的に「神経発作」が緩和した(安らぎ感とリラックス感)。そして翌年、アン叔母がいる牧

場を訪問し、牛たちが牛樋（締めつけ機）のなかでくつろぐのを目撃し、G自身もアン叔母に頼んで牛樋のなかに入って見た（締めつける操作はアン叔母が行うが、締めつけの加減自体はGがアン叔母に指示した）。その後、牧場から高校に戻って、Gは締めつけ機を自作しはじめた。

最初の締めつけ機は2枚の堅い合板でうつ伏せとなったGの体を両側から締めつけるという単純なものであったが、合板に柔らかい当て物（soft padding）、つまり気泡入りパッドを付けてみると、Gはゆったりと落ち着いた気分になり、また、他人に対してやさしい穏やかな気持ちを抱くようになった。そして、このような心境を反映して、Gが見る夢も、19歳ころのD1「子犬たちを可愛がる夢」とD2「アン叔母のいる牧場に行って青空の下の緑の牧草地にいる夢」のように、「愉快的な夢」となった。

D1は夢のなかでGが子犬たちを可愛がるというもので、ここには可愛がるGと可愛がられる子犬たちが対応している。

Gは *Animals in translation* (Grandin & Johnson, 2005) のなかで雄猫のビーリー (BeeLee) とのエピソードについて述べている。Gがきつく抱きしめるのでビーリーはいつも逃げ出していた。しかし、Gが初めて柔らかい締めつけ機を使った直後、締めつけ機のなかで味わった感情をビーリーに伝えようと思ってビーリーを撫でてやると、ビーリーは逃げないで、ごろごろと喉を鳴らして体をGにすりよせてきた。Gの実生活での猫がD1では子犬に変わっているが、いずれにしる、動物は強く抱きしめられることを嫌うもので、強く抱きしめられたらもがいて逃げようとする。しかし、Gが優しい接し方をすれば、動物のほうも優しく反応する。

もう1つのD2は、Gが17歳のときに訪問したアリゾナ州のアン叔母の牧場の光景である。Gは思春期に入って以来しょっちゅうパニック発作（神経発作）に襲われ、牧場滞在中もパニック発作に襲われたが、牛樋を自ら試してみることによってパニック発作から解放された。牛樋のあるアン叔母の牧場は、Gにとっては「安らぎ」を象徴する大変ナイスな場所であった。

## V 白日夢、締めつけ機、夢の関連性

Gの小学校時代のいろいろな白日夢、それも特にDd3~Dd5は、不安を緩和して安らぎを得るための、イメージレベルでの演習と言える。それらは効果的であったがしかし、思春期に入って生理的レベルのパニック発作に襲われるようになると、イメージによる効果は薄れてきた。そのようなとき、荒々しい子牛が牛樋のなかで落ち着きを取り戻すのを見たことをきっかけとして、Gはイメージではなく、現実の圧迫感を希求する。そして、皮膚への強い圧迫感によって安らぎを得るようになる。その上、最初の硬い合板から当て物をあてた柔らかい合板へと締めつけ機を改良すると、他者に対する優しい気持ち、穏やかな愛情を抱けるようになった。このような心境を反映して、Gの夢には愉快的な夢が出現している。このように、Gの白日夢・締めつけ機・夢は相互に関連しあっている。[Gの場合、他者との感情関係の性質は優しい気持ちや穏やかな愛情といったもので、いわゆる「(人への) 惚れ込み」や「恋愛」とは無縁であった。]

## VI Donna Williams との比較

筆者は以前いわゆる高機能自閉症者の Donna Williams (1963-2017) (以下、W と略す) の夢や

白日夢について吟味したことがあるが（名島, 2010, 2016）、ここではこの W と G について比較してみたい。

W の夢にはよく、「子猫」が登場する。子猫は自己の感覚と感性のままに生きようとする動物であるが、同時に、W のなかの「健全な精神・正気さ (sanity)」でもある。W は自分のなかの「子猫」を保護するために憎しみと怒りに満ちたウィリーや明るく社交的なキャロルといった「仮面の人物 (character)」を創出することによってさまざまな危機を乗り越え、社会的人間へと成長していった（ウィリーは G が 2 歳ころ、キャロルは 5 歳のころに作り出した）。一方、G の場合には、仮面の人物を創出するといった心的操作は見受けられない。G ではもっぱら、安らぎをもたらしてくれる機械装置の白日夢とか、締めつけ機という現実の機械装置が用いられている。

このような違いの一因として、W と G が置かれた環境、それも人的環境の違いが挙げられるかもしれない。W の場合、W の母親が幼い W を虐待した。例えば、2 歳の W にタバコの火を押しあてたり、ベルトの金具で何度も打ったり、「宇宙人」とか「蛆虫」と言って W を罵ったりした。W はその生涯を通して、母親に対する愛着心をまったく表明しなかった。一方、G の母親はたえず G の将来を案じ、G の社会化に向けてあれこれ力を尽くした。G は折に触れて、このような母親に対する愛情と感謝を表明している。

W のように自分を取り巻く環境が破壊的・暴力的である場合、人は自己の一部を分裂・排除したり、いろいろな仮面を作り出すことによって過酷な環境に対峙しようとする。しかし G の場合、基本的信頼のレベルで母親から抱えられていたので、特に複雑な心的操作を必要としなかったであろう。G にとってはおそらく、心理的レベルよりも身体的レベルでの対処が必要であったろう。

## Ⅶ おわりに

G の夢について補足しておく、幼児期から高校あたりまでの間に G は「愉快でない夢」、つまり不安な夢・嫌な夢・恐ろしい夢・怒る夢などをいくつか見ているはずであるが、これらは G の論文や著作には見当たらない（盲目になるという悪夢は G が 34 歳のときの夢である）。実際のところ、夢のなかの顕在感情は「幸福感」から「恥」まで計 16 のカテゴリーに分けられるほど多彩であり（名島, 2008, 2012）、G が愉快でない夢をまったく見ていないということは考えにくい。〔「顕在感情」とは夢主が夢のなかで実際に味わう感情のこと。同じ感情でも、夢の構成要素のなかのどれかに象徴的な形で潜んでいるのが「潜在感情」である。〕

愉快でない夢が G によってまったく書かれなかった理由はよくわからない。あえて推測すれば、意識レベルで不安・恐怖・怒り等が大勢を占めていた G にとっては、不安夢や恐怖夢等によって改めてそれらの感情に直面するだけの心の余裕はなかったのではないかと思われる。つまり、それらの感情を生み出す夢そのものを意識から排除することによって（忘れ去ることによって）、安全保障感 (security) を維持しようとしたのではないかと思われる。

[付記] 本論文は、2015 年 5 月 31 日に開催された日本心理臨床学会第 34 回春季大会ワークショップにおいて筆者が講義した「自閉症者の夢分析—ドナ・ウィリアムズとテンプル・グランディン」

の一部を推敲したものである。

## 文献

- Ayres AJ (1979) *Sensory integration and the child*. Los Angeles: Western Psychological Services. (佐藤剛監訳, 1983, 子どもの発達と感覚統合, 共同医書出版社)
- Grandin T (1970) Sensory interaction processes and the effect of pressure applied to the lateral body surfaces on auditory thresholds. Undergraduate thesis, Franklin Pierce College, Rindge, N. H.
- Grandin T (1975) Survey of behavioral and physical events which occur in hydraulic restraining chutes for cattle. Master's thesis, Arizona State University.
- Grandin T (1983) Letters to the editor, "Coping Strategies". *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 13, 217-221.
- Grandin T (1984) My experiences as an autistic child and review of selected literature. *Journal of Orthomolecular Psychiatry*, 13(3), 144-174.
- Grandin T (1989) Effect of rearing environment and environmental enrichment on behavior and neural development in young pigs. Doctoral Dissertation, University of Illinois, Urbana, IL.
- Grandin T (1995) *Thinking in pictures: My life with autism*. New York, NY: Doubleday. (カニングハム久子訳, 1997, 自閉症の才能開発—自閉症と天才をつなぐ環, 学習研究社)
- Grandin T (2008) *The way I see it: A personal look at Autism & Asperger's*. Arlington, TX: Future Horizons, Inc. (中尾ゆかり訳, 2010, 自閉症感覚—かくれた能力を引き出す方法, NHK 出版)
- Grandin T, Scariano M (1986) *Emergence: Labeled autistic*. Novato, CA: Arena Press. (カニングハム久子訳, 1994, 我, 自閉症に生まれて, 学習研究社)
- Grandin T, Barron S (2005) *Unwritten rules of social relationships: Decoding social mysteries through the unique perspectives of autism*. Arlington, TX: Future Horizons, Inc. (門脇陽子訳, 2009, 自閉症スペクトラム障害のある人が才能をいかすための人間関係 10 のルール, 明石書店)
- Grandin T, Johnson C (2005) *Animals in translation: Using the mysteries of autism to decode animal behavior*. New York, NY: Scribner. (中尾ゆかり訳, 2006, 動物感覚—アニマル・マインドを読み解く, NHK 出版)
- Grandin T, Panek R (2013) *The autistic brain: Thinking across the spectrum*. New York, NY: Houghton Mifflin Harcourt. (中尾ゆかり訳, 2014, 自閉症の脳を読み解く—どのように考え、感じているのか, NHK 出版)
- Harlow HF (1971) *Learning to love*. San Francisco: Albion Publishing Company. (浜田寿美男訳, 1978, 愛のなりたち, ミネルヴァ書房)
- 名島潤慈 (2008) 夢のなかに表れる感情の分類 山口大学心理臨床研究, 8, 3-12.
- 名島潤慈 (2010) ある自閉症者の夢分析—Donna Williams の見た子猫の夢の検討 山口大学教育学部研究論叢, 59, 第 3 部, 253-260.
- 名島潤慈 (2012) 夢分析の臨床的意義と技法—能動的夢分析 (岡本祐子・兒玉憲一編著, 心理学研究の新世紀 4 臨床心理学, ミネルヴァ書房, 39-52)
- 名島潤慈 (2016) 高機能自閉症者 Donna Williams の幻視・白日夢・夢における超自然的特性の吟味 山口学芸研究, 7, 55-66.
- Sacks O (1995) *An anthropologist on Mars: Seven paradoxical tales*. New York, NY: Alfred A Knopf, Inc. (吉田利子訳, 1997, 火星の人類学者—脳神経科医と 7 人の奇妙な患者, 早川書房)
- Sheehan DV, Ballenger J, Jacobsen G (1980) Treatment of endogenous anxiety with phobic, hysterical, and hypochondriacal symptoms. *Archives of General Psychiatry*, 37(1), 51-59.